

陸上競技の日本インカレ地方開催における考察

A study of requirements for inter-college track and field games held in local cities

1 K08B210-7 森 雅美

指導教員 主査 武藤泰明先生 副査 原田宗彦先生

【研究背景・目的】

私は現在、早稲田大学競走部でマネージャーを務めており、2011年9月に熊本で開催された第80回日本学生陸上競技対校選手権大会を経験した。近年は東京の国立競技場を中心に行われてきたため、慣れない地方での日本インカレ開催となり参加する学生だけではなく、大会主催者である日本学生陸上競技連合にも戸惑いが多くあった。今後も日本インカレが地方開催される可能性が高いということで、今回の日本インカレの課題を明確にして改善を図る必要があると考えた。今回の日本インカレ開催についてハード・ソフトの両面から検討し、不足していた点を明らかにする。そして今後、地方でインカレを開催する場合、選手・大会関係者にとってより競技しやすい大会を行うために必要な準備・指標を提示することを目的とする。

【研究方法・内容】

本研究の対象は第80回日本学生陸上競技対校選手権大会とする。比較対象として第95日本陸上競技選手権大会を取り上げ、大会要項を比較し、大会開催の上での違いを検討する。次に、この二つの大会の主催者並びに2007年世界陸上大阪大会担当者にインタビューを行う。また、陸上競技ルールブック2011を参考によりよい日本インカレ開催について提言していく。ルールブックを確認したところ、日本インカレ・日本選手権共に、日本陸上競技連盟の競技規則に基づいて競技会が開催されていることが分かった。これを踏まえて日本インカレ・日本選手権の大会要項を見ると①競技場選定②セキュリティ③審判員という三点に大きな課題があると分かった。

〈ハード面・競技場〉インカレ開催が決定した地域に第1種公認陸上競技場があること、その競技場が公認条件を満たしているかの確認が必要である。競技場によって仕様が異なるが、できる限り選手が競技しやすい環境を整えることが求められる。

〈ソフト面・セキュリティ、審判員〉セキュリティについては警備スタッフを雇うことがベストであるが、学連では十分な予算を確保できないため最低限、IDコントロールを徹底することが必要である。観客に対してはチケットの有料化が一つのセキュリティ効果を持っているといえる。審判員については制度そのものの見直しが必要である。特に資格取得、昇格については技量が保証された上でそれぞれの資格が与えられるべきである。また、各都道府県陸協において若手審判員を養成する体制を整えることやスターター講習会の実施は急務といえよう。大会主催者が各都道府県陸協にしっかりと意見を言える関係作りも不可欠である。大会主催者が運営に必要なことを見極め、審判員と連携を取り、選手目線での競技運営が行われるべきである。

【まとめ】

ハード面の競技場選定については上記に示した一定条件を満たす競技場が選定され、環境が整備される必要がある。そして、ソフト面においてはリハーサル大会を行うことである程度の懸念事項は解決されると思われる。リハーサル大会を開催することで、本大会での運営・審判がスムーズになり、競技者にとっても満足のいく競技環境が整えられるであろう。審判員制度の見直しや審判技術に関する講習会の開催については日本陸上界全体で検討されるべき事案である。そして、何より日本学連・地区学連・都道府県陸協の密な連携が重要となる。これは熊本でのインカレの大会事務局の設置意義の曖昧さを反省とし、大会の運営組織が首都圏開催の時よりも物理的に離れている分、意識的に行われなければならない。インカレには「学生が運営する大会ならでは」の難しさがある一方で「大学陸上競技部の部員」である学生が運営するからこそ、競技者と同じ視点に立った大会作りができるのである。運営側と選手側が一つになって日本インカレを作り上げるという意識を持ち続けてもらいたい。